トカレフクラブ

○さくら中学校・校舎

白く薄汚れた三階建ての校舎。

○同・三年二組・中

黒板に「中間テスト」の文字。

生徒たちが問題に取り組んでいる。

その中に、小柄ではあるが、金髪でピアスをした秋葉公平（15）がいて、眠そうに大あくびをしている。

他に、小柄で真面目そうな成原圭太（14）、体が大きく茶髪の須藤仁（15）や沼上俊彦（14）、そして髪を金色に染めた上原詩織（14）らの姿がある。

×　×　×　×

掃除の時間。

公平が圭太の腹を蹴る。

うずくまる圭太。

とり囲んで、それを面白そうに見る須藤

や沼上たち。
公平「一発、百円として、あと三十発はいくからな」
圭太「（泣いて）だって……」
公平「なにがだってだ？　ああ？」
と圭太の髪を掴む。
圭太「僕、お金無いし」
公平「知るか、そんなこと！　なきゃあ、どっかで作ってこいよ！」
と頭突きを入れる。
爆笑する須藤たち。
須藤「出た、秋葉の頭突き！」
沼上「頭突きは二百円で計算してやれよ。成原、死んじゃうぞ！」
うずくまる圭太。
公平、圭太を蹴りまくる。
公平「ふざけんじゃねえぞ、テメエは！　人をナメやがって！」
窓際に詩織がいる。
その隣に伊藤瑠璃（15）。

二人は、公平の行為を眺めている。
瑠璃「（苦笑）よくやるよね、あいつら」
詩織、返事をせず公平を見ている。
公平は、いいように圭太を蹴っている。
瑠璃「（笑って）成原、ひさ～ん」
詩織、チラリと瑠璃を冷めた目で見る。
瑠璃、その視線にたじろいで、媚びたように笑い、目をそらせる。

○商店街
必死に逃げるヤンキー中学生Ａ。
それを追う公平。
遅れて須藤や沼上たち。
公平、追いつくと、Ａの襟首を掴み、引きずり倒す。
公平「手間かけさせやがって！」
と特殊警棒を取り出し、Ａの顔面を殴る。
Ａの鼻から血が噴き出す。
須藤や沼上たちが追いついてきて、
沼上「うわあ……おまえ無茶すんな」

公平、笑いながら沼上を振り返り、
公平「やるときゃやらねえとな。こんなバカにナメられるわけにはいかねえからよ」
とAから財布を奪う。
須藤、そんな公平をニヤニヤと見ている。
須藤「おー怖ええ。秋葉さん、気合い入りまくりじゃないすか？　俺らはシメないでくださいよ」
公平「（笑って）いくらなんでも、そりゃねえよ。なんで、俺が須藤くんと揉めるのよ？」
須藤、急に真顔になり、
須藤「あたりめえだ、バカ。なんで俺が、お前なんかにシメられるんだよ？」
と公平の手から財布を奪うと、中の札だけ取って公平に戻す。
須藤「じゃあな、俺、ちょっと先輩らと約束あるから行くわ」
と去っていく。
残された公平や沼上たち、顔を見合わせ、
沼上「……ま、俺らは帰るとするか」

公平、札の入ってない財布を、少年Ａに叩きつける。

○団地群（夕方）

同じ外観の棟が幾つも並んでいる。

○同・公平の家・玄関・中（夕方）

公平が帰ってくる。

○同・リビング（夕方）

公平の母、秋葉君江（45）が派手な水商売風の化粧をしている。

公平、無言でその後ろを通り、自室へ。

君江、小さく吐き捨てるように、

君江「……クソガキが」

公平の耳に、その言葉は届いている。が、聞こえないふりをして部屋に入っていく。

○同・公平の部屋（夕方）

公平が寝転んで煙草を吸っている。

公平「（小さく）死ね！」

○さくら中学校・体育館裏

公平、須藤、沼上ら六人がいる。

須藤、一万円札の束を数え、

須藤「やっべえ！　足んねえよ。十六万しかねえじゃんかよ！　いるのは二十万だって言ったろうよ！」

黙りこむ公平たち。

須藤「足んねえよ！　どうすんだよ！」

公平「でも、いちおう全部売ったし……」

須藤、公平を蹴り、

須藤「なに言い返してんだよ、テメエはよ。だれがそんなこと聞いてんだよ！」

公平「ごめん」

須藤「おい、俺が牟田さんらにシメられちまうよ。どうすんだよ！」

一同「……」

須藤「（大きく）持ってきてくれよ、あと四万！貯金でもなんでもいいからよ！」

一同「……」
須藤「（怒鳴り）なあ！」
沼上、財布を取り出し、
沼上「わかった。とりあえず五千円しかねえけど、これ使ってよ」
公平を除く四人が、五千円ずつ取り出し須藤に渡す。
須藤「（笑顔）悪いな無理言って。助かるよ」と受け取り、公平の顔を見る。
公平、気まずそうな表情。
公平「……悪い。俺、いま金無くてさ」
須藤「だからなんだよ？　みんなが出してくれてんのに、お前だけ出さねえとかあんのかよ？」
公平「……」
須藤、公平を睨む。
公平、わずかに怯んだ表情をする。
須藤「なあ頼むよ。秋葉の気合いがあれば、金なんかすぐ作れっからよ。七時までに、なんとか都合つけてくれよ、なっ？」

○商店街

車の通行もある商店街。

公平が一人で歩いている。

公平「（呟く）なんで、俺だけ二万なんだよ。やってらんねえ」

公平、あたりを見回し、買い物バックを下げた初老の女性、柏田敏江（60）に目をつける。

敏江の後をつける公平。タイミングを見計らい、バックを掴み、引っ張る。

が、敏江が激しく抵抗。

敏江「（叫ぶ）誰か！　泥棒！　誰か！」

もみ合う公平と敏江。

敏江「誰か！　誰かぁ！」

公平、バックを諦めて走り出す。

○小公園

公平が息を切らし駆け込んでくる。

公平「ふざけんな、ババア！」

と公園内の看板を蹴飛ばす。

○松村書店・中

中規模の書店。

コミックスのコーナーに、鞄を肩にかけた公平がいる。

公平、ちらりとレジの方を確認する。

レジでは、店主の松村隆久（62）がぼんやりとしている。

○大規模古書店「古本クラブ」・前

公平が鞄を抱え、「古本クラブ」の前に立っている。そして、店の入り口にある張り紙を読む。

そこには「買い取りのルール。十八才未満のお客様は、①保護者同意書　②本人確認書類　③保護者への電話確認が必要となります」と書いてある。

公平「……マジかよ」

○河川敷沿いの道（夕方）

幅の広い川がゆったりと流れている。

その脇の道を公平がトボトボと歩く。

公平「あーやってらんねえ」

○住宅街（夕方）

こぎれいな一戸建てが並ぶ住宅街。

鞄を抱えた公平がウロウロと歩いている。

とある家の前で立ち止まり、その家を見あげる。しかし、ため息をつき、再び歩きだす。

×　×　×

公平、再びその家の前にやってくる。

しばらく逡巡したのち、決心したようにインタホンを押す。

門の表札には「成原」と書いてある。

扉が開き圭太の母、成原美紀（43）が顔を出す。

美紀「どなた？」

公平「あの……秋葉ですけど、圭太くんいますか？」

怪訝そうな美紀の顔。公平の姿を上から

下までじっと見て、
美紀「秋葉……さん？」
公平「秋葉公平です。小学校の時、よく遊びにきてた」
美紀、公平のことを思い出した様子。けれど表情は不審そうなまま。
美紀「ああ……なんの御用？」
公平「圭太くんいます？」
美紀「ごめんなさい。圭太は今――」
圭太の声「あがんなよ」
振り返る美紀、そこに圭太がいる。
美紀「圭太」
圭太「（公平に）あがりなよ、公平くん」

○圭太の部屋（夕方）
きれいに整頓された室内。
本棚には参考書と大量の漫画本。
机の上にはノートパソコンがある。
公平、室内を見回し、
公平「なんか、あんま変わってないな。（パソ

コンを見て）いや、やっぱ変わったか。（漫画を見て）漫画も増えてるし」

圭太「うん」

公平の視線が、とある漫画本のシリーズに注がれている。

公平「どうしたの？」

公平「いや、なんでもない。悪いけど、俺、帰るわ」

圭太「どうして？　今来たばっかりなのに」

公平「いや……漫画買って貰おうかと思って来たんだけど、お前、もう持ってるし」

と鞄を開け、三十巻ほどのコミックスを見せる。

それは明らかに新品で、万引きしてきた物とわかる。

○松村書店・中（夕方）

ごっそりと空になった書棚。

それを松村が茫然と見ている。

○圭太の部屋（夕方）

圭太「買おうか……これ？」

公平「マジ？　いいのかよ？　だって、お前、
　これ持ってんじゃん」

圭太「ただ条件があるんだ」

公平「条件？」

圭太「これを僕が買ったって学校の人に言わ
　ないで欲しい。もし知られると、いろんな
　物を買わされそうな気がするから」

公平「おおわかった。言わねえ。ていうか、
　言うかよ、そんなこといちいち」

圭太「（笑顔）うん、ありがと」

×　×　×　×

ローテーブルの上にロールケーキ。

公平が、それを食べながらコミックスを
　読んでいる。

公平「やべえ、なんかこの感じ、すげえ懐か
　しいんだけど」

圭太「（笑って）うん」

×　×　×　×

コミックスを読み続ける公平。
部屋の時計を見る。六時。
公平「ヤベッ！　俺、もう行くわ。ちょっと用事があるんだ」
と立ち上がる。
圭太「うん」
公平、しかしそのまま気まずそうな顔で圭太を見る。
圭太「どうしたの？」
公平「悪い。もう三千円だけ貸してくれねえか？　今のままでも大丈夫な気がするけど、一応二万必要なんだ」
圭太「……うん、わかった」
公平「マジ？　悪いな、助かるよ」

○成原家・前（夕方）
公平「じゃあ、俺行くわ」
圭太「あっ待って」
とポケットからスマートフォンを出す。
圭太「僕の電話番号とアドレスを教えとくよ。

あの・・・・・これもクラスの人たちには秘密にしといて。親に禁止されててスマホとか持ってないことにしてあるから」

公平「わかった。言わねえ」

公平もスマホを取り出し、アドレスなどを交換する。

圭太「僕、公平くんに感謝してるんだ」

公平「感謝？」

圭太「学校で、僕がお金が無いって言っても、なんにも言わないでいてくれるから」

公平、圭太の家を見る。二階建ての立派な造り。

公平「まあ、そりゃあな。言ったって、どうなるもんでもないしな」

圭太「それに、昔はいつも僕のことを守ってくれたし」

公平、少しバツが悪そう。まるで聞こえてないかのように素知らぬ顔をする。

圭太、そんな公平を見てニコリと笑い、

圭太「また遊びにおいでよ」

公平「（笑って）おお、また来る」

○さくら中学校・三年二組・中

朝のホームルーム。

担任の関根弘志（38）が出席簿を手に教壇にいる。関根、覇気のまるでない声で、

関根「えーと、いないのは今日も成原圭太だけと。他に休んでる者はいないな？」

公平、空いている圭太の席を、ぼんやりと見る。

○信用金庫・前

商店街にある信用金庫。

二人乗りのスクーターがやってきて、信用金庫の前に停まる。男たち、ヘルメットをかぶったまま中に入っていく。

○同・店内

閑散とした店内。

ヘルメットの男たちがくる。

北山幹夫（22）と及川信次（19）。
北山、カウンターに近付き、中にいる女子職員に銃（トカレフ）を突き付け、
北山「金を出せ！」
女子職員「（硬直）……」
北山「（大きく）聞こえねえのか！」
とトカレフを天井に向けて撃つ。
悲鳴。

○河川敷沿いの道
公平と圭太が並んで歩いている。
公平、五千円を圭太から受け取り、
公平「いつもワリいな。借りとくよ」
圭太「ううん、大丈夫だよ」

○河川敷にある公衆トイレ・外
北山らが乗っていたバイクが放置されている。そのそばに二台のスポーツタイプの自転車。

○同・中

北山と及川が着ていたシャツやズボンを脱ぐ。その下からサイクルウェアが出てくる。

北山「急げ！」

北山、リュックから自転車用のヘルメットとサングラスを取り出し身につける。

北山「行くぞ！　さっさと着換えろ！」

○河川敷沿いの道

並んで歩く公平と圭太。

圭太「学校どう？」

公平「同じだよあんなとこ。行かねえほうがいいよ、どうせロクなことねえんだから」

圭太「……うん」

二人の横を北山と及川の乗った自転車が猛烈なスピードで走り去っていく。

○河川敷にある公衆トイレ・外

北山らのバイクが放置されている。

○同・中

公平が咥えタバコで小便をしている。

圭太は、洗面台で手を洗っている。

圭太、ふと脇にあるゴミ箱の中を見る。

そこには北山らが脱ぎ捨てた服が捨ててある。その服の陰に何かが見える。そっと手を伸ばし、それを手に取る。

トカレフである。

圭太「公平……くん」

公平「公平でいいよ。なに？」

圭太は、手につまんだトカレフを見せ、

圭太「これ、捨ててあった」

公平、まじまじとトカレフを見て、

公平「本物か……それ？」

圭太「さあ？」

公平、トカレフを受け取り、眺める。

構え、小便器に狙いをつけてみる。

引き金を引く。

轟音。小便器が砕ける。

同時に公平は後ろに転がる。

茫然として顔を見合す二人。
公平「ヤベえ、これ本物だ！」
圭太「ど、どうする？」
公平「とにかく逃げよう！」
とトカレフを服の下に隠す。
圭太「（驚いて）えっ？　ちょっと、それ？」
公平「持ってくよ！　当たり前だろ！　さあ、逃げるぞ！」

○上空
警察のヘリコプターが、強盗事件への情報提供を呼び掛けている。
放送「本日、二時五十分頃、さくら南商店街において、拳銃を使った強盗事件が発生しました。犯人と思われる二人組の男は、拳銃を所持したまま逃走しており、たいへん危険です。不要不急の外出は控え、不審な人物を目撃された方は、ただちに警察に連絡してくださるようお願いします」

○小公園

ベンチに並んで座る公平と圭太。

二人は、ヘリコプターからの放送に耳を傾けている。

圭太「さっきの銃ってさ……」

公平「ああ」

圭太「どうするの、それ？」

公平「どうするって、貰うよ。当たり前だろう。本物の銃なんだぞ。普通、こんなの手に入らないって」

圭太「うん……まあ」

その時、公園の脇をパトカーがゆっくりと走っていく。

助手席の警官が、公平にじっと注目している。

公平、警官を鋭く見返し、

公平「なに見てんだよ」

圭太「（慌てて）駄目だよ。銃、持ってるんだし、それに煙草だって。もう行こう」

と立ち上がる。

並んで歩く公平と圭太。
停車するパトカー。警官がじっと公平たちを見ている。
圭太「（歩きながら）僕が銃を預かろうか？」
公平「いいのかよ？」
圭太「うん。僕の方が格好も普通だし、なんなら煙草も預かっておくよ」
公平、振り返って警官を見る。
警官たちは、まだ公平を見ている。
二人、角を曲がると、
公平「ワリい、預かってくれるか？　また、明日にでも遊びに行くわ」
と素早くトカレフと煙草を圭太に渡す。
圭太「（嬉しそうに）うん、じゃあ、また明日」
○公平の部屋（夜）
公平が、手を銃の形にして、架空の銃を構えている。
○フラッシュ

河川敷のトイレでトカレフの引き金を引く公平。
轟音と共に、後ろにひっくり返り、同時に小便器が砕ける。

○元の公平の部屋（夜）
公平、架空の銃を構え続ける。
公平の顔がかすかに微笑んでいる。

○パソコン画面
画面いっぱいにトカレフの映像。
圭太の声「いろいろ調べたけど、これトカレフっていう銃だと思う」

○成原家・圭太の部屋
圭太と公平がパソコンの画面を見ている。
圭太「昔のソビエトの銃で、ヤクザの人たちの間に大量に出回ってるんだって」
公平「なるほど」
とテーブルの上のトカレフを手に取る。

テーブルには、他に真新しいモデルガンのトカレフが置いてある。
公平、左手でモデルガンを持ち、
公平「けど、モデルガンのトカレフまで買うか？　しかも、昨日の今日で」
圭太「でも、調べたら、トカレフは安全装置とか無くて危ないらしいし、モデルガンで構造とか勉強したらどうかなって」
公平「で、買ってきたと」
圭太「うん」
と公平からモデルガンの方を受け取り、弾倉を引き抜く。
圭太「こうやって弾を込めるんだ。（笑って）でも、弾の予備なんて無いけど」
その時、ドアの外から「圭太、ちょっといい？」という美紀の声が聞こえてくる。
公平と圭太、慌ててトカレフを隠す。
圭太「ごめん、ちょっと待っててて！」

○同・廊下

ロールケーキと紅茶を載せたトレイを圭太は美紀から受け取る。

美紀「圭太、あなた大丈夫？」

圭太「何が？」

美紀「秋葉くんのこと。あの子、ずいぶん変わっちゃったけど、あなた、何か嫌な思いとかしてない？」

圭太「（キッパリ）してないよ。公平は、僕の友達だよ」

○同・圭太の部屋

公平、手にしたトカレフをじっと眺めている。

その時、「うるさいな！　ちゃんと勉強はしてるでしょう！」という圭太の怒鳴り声が聞こえてくる。

公平「……」

圭太の声「ごめん、ちょっとドア開けてくれるかな？」

公平、立ち上がりドアを開ける。

トレイを持った圭太がいる。
公平「（笑って）来ました、成原家名物、ロールケーキ！」
×　×　×　×
公平と圭太、ロールケーキを食べ、紅茶を飲んでいる。
公平「なあ、圭太って高校行くんだろ？」
圭太「うん、行くよ」
公平「大丈夫なのかよ、内申書とか。学校、ずっと休んでるし」
圭太「僕、教育支援センターってとこに通ってるんだ。そこに行けば、学校に行ったことと同じになるから。だから出席は大丈夫。テストだけちゃんと受けてれば、内申書は問題ないって。関根先生が言ってた」
圭太「関根が？」
圭太「うん。……実は、クラスのこと、関根先生に相談したことがあるんだ。ごめん」
公平「いいよ、なんで謝るんだよ？　で、関根はなんて言ってた？」

圭太「（笑って）なんか先生、あんまりかかわりたくないみたいだった」
公平「あいつ、やる気ねえからな」
圭太「で、教育支援センター行くから大丈夫ですって言ったら、すごく嬉しそうに……」

○フラッシュ
さくら中学校の廊下。
関根と圭太がいる。
関根、満面の笑みで、
関根「そうか、うん、それが一番いいやり方だな。まあ、何事も経験だ。後はテストの時だけ、頑張って学校に来てくれ」

○元の圭太の部屋
公平「あのクソバカ！」
圭太「だから、内申書は大丈夫だと思う」
公平「ふーん、でも、そんな施設があるなら、圭太の頭なら高校なんて楽勝だな」
圭太「公平くんもさあ」

公平「（笑って）だから公平でいいって」
圭太「公平……も、高校行くんでしょう？」
公平「行くよ、もちろん。いくらなんでも中卒とかマズイしょ」

○さくら中学校・三年二組・中
期末テスト。
夏服姿でテストを受ける生徒たち。
その中に、公平や圭太の姿もある。

○同・廊下
掃除の時間。
気弱そうな小柄の熊谷稔（14）が窓から校門の辺りをじっと見ている。
その視線の先にいるのは詩織である。

○同・三年二組・中
圭太が、真面目そうな二見克彦（15）と喧嘩させられている。
それを見ている須藤や公平たち。

けれど、二人の喧嘩は迫力が全くない。
須藤「（強く）お前ら、やる気あんのかよ！
もっと気合い入れてやれよ！」
二見、圭太を殴る。しかし、力が無い。
須藤「なんかつまんねえな。おい秋葉、こい
つらに気合い入れてやってくれよ！」
公平「おお、お前ら、もっと真剣にやれよ！」
須藤、公平の頭をはたき、
須藤「ちげーよ、見本を見せてやれって言っ
てんだよ！　喧嘩のやり方を、こいつらに
味あわせてやれよ！」
公平、ほんの少しだけためらった表情。
が、圭太を見ながらゆっくり立ち上がる。
公平「ったく、お前らの気合いが足んねえか
ら、俺の出番になっちまったじゃねえかよ」
と二見に頭突き。
爆笑する須藤たち。
須藤「出た！　いきなりの頭突き！」
公平、圭太の顔を見る。
はやし立てるギャラリー連中。

沼上「どうした？　さっさとしばけよ！」
須藤「なにやってんだよ、さっさと行け！」
仕方ないという表情の公平、圭太に向かい突進し、そのままドロップキック。
鼻血を噴き出す圭太。
盛り上がる須藤たち。
須藤「ドロップキック！」
沼上「お前、メチャクチャだぞ！」
その時、熊谷が教室に入ってくる。
熊谷「あの……来たよ。ベンツ」
須藤「おっ来やがったか、ヤクザ野郎が」
とゾロゾロと教室を出ていく。
公平、圭太に、
公平「（小声で）さっさと帰れよ」

○同・校門付近
フルスモークのベンツが停まっている。
そこに近付いていく詩織。
校舎の窓からは、須藤たちが面白そうに見物している。

詩織、ベンツに乗り込む。

○同・廊下

須藤たち、盛り上がっている。

沼上「乗ったあ！　やべえ、あれ絶対ヤクザだよな。なんなんだよ上原ってよ！」

須藤「怖え女だな、まったく」

○ベンツ・車内

助手席の詩織、運転席の本間卓也（22）と長いキスをしている。

本間の手が、そのまま詩織のスカートの中に伸びる。

その手を詩織がさえぎり、

詩織「ちょっと、ここ学校の前だって」

本間「そこが燃えるんじゃねえかよ」

詩織「駄目だよ、警察来たら困るでしょう」

本間「（舌打ち）なんだよ、つまんねえな」

その時ベンツの脇を、血で染まったティシュで鼻を押えた圭太が走っていく。

本間「（見て）なんだあれ？　いじめか？」
詩織「……たいへんなんだよ、中学生ってのはいろいろあって」

○河川敷沿いの道
真夏の日差し。
日焼けをした子供たちが自転車に乗って走っていく。
上流に鉄道橋がある。

○鉄道橋の下
公平と圭太がいる。
五メートルほど離れた所に空き缶。
周囲の様子を窺う二人。公平の手には隠し持つようにトカレフがある。
公平「誰もいないな？」
圭太「（見回し）うん……たぶん」
電車が轟音と共に近付いてくる。
公平、トカレフを構え、空き缶を狙う。
電車の通過音で銃声を消す狙いだ。

圭太、何かに気が付き、公平に声をかけるが、轟音で聞こえない。慌てて公平の肩に触れ、トカレフを隠させる。
電車が遠ざかっていく。
公平「（強く）なんだよ？」
圭太「遠くに人がいる！」
公平、その方向を見る。犬の散歩をしている金髪の少女の姿が見える。
公平「なんだよ、女じゃねえかよ」
圭太「でも、こっちに来るよ」
歩いてくる少女は詩織である。
圭太「あれ？　あの人？」
公平「上原か……あれ？」
やってきた詩織、二人を見て、
詩織「なんか、変わった組み合わせだね？」
公平「関係ねーだろ」
詩織「ねえ、それ本物？」
公平「何が？」
詩織「だから、それ」
と公平の腹の辺りを指さす。

そこには隠したトカレフの膨らみがある。
公平「……」
圭太「モ、モデルガンだよ、それ」
詩織「ふーん、じゃあ、あれは何？」
と空き缶を指さす。
詩織「モデルガンって弾が出るの？」
公平「（圭太に）行こうぜ」
歩き出す公平と圭太。
詩織が、その後ろに続いて歩く。
詩織「警察がこの前、うちに来たらしいよ。
このあたりで銃の噂を聞かないかって」
黙って歩き続ける公平と圭太。
詩織「この前、銀行強盗の犯人が捕まったでしょう。それでさあ――」
公平、立ち止まり、振り返る。
公平「捕まったのか、犯人？」
詩織「知らないの？　それで犯人は、銃をあそこのトイレに捨てたって供述したんだって。ほら、なんか便器が壊されたことがあったでしょう？　それも銃で撃たれてたらし

いよ」
公平「まあ……俺らには関係ないからな」
と再び歩き出す。
詩織「でもヤバいよね、本物の銃だよ。どうする？」
と公平らの後ろにつき歩く。
詩織「聞いた話しだとさ、本物の銃突き付けられて、根性出せる人なんていないんだって。ほら映画とかで『撃てるものなら撃ってみろ』みたいなさあ。実際はさ、殺さないでくれって泣きながら頼むらしいよ」
公平「だから、なんだよ？」
詩織「（笑って）ヤバいよね、本物」
無言で土手を昇る公平と圭太。
その後ろに詩織が続く。
詩織「銃の試し撃ちってさあ、普通は山の中とかでやるんじゃない？　あとは外国とかさあ」
公平「（小声で圭太に）なんなんだよ、この女？」
圭太「さあ？」

詩織「なんか、楽しみだよね？」
公平「（小声で圭太に）わけわかんねえよ。何が楽しみなんだよ？」
圭太「ねえ、公平？」
公平「なんだよ？」
圭太「行ってみようか、山？」
公平「山？　なんだよお前まで？」
圭太「だから……（小声で）トカレフを撃ちにさあ」
公平「そりゃあ、いいけど。（詩織を見て）今、ここで、その話をするなよ」
圭太「だから、上原さんも誘ってみてさ」
公平「（大きく）ハア？　圭太、お前、なに言っちゃってんの？」

○走る電車・車内
圭太を挟み公平と詩織が並んで座る。
ポロシャツにジーンズの圭太。
ダボダボのジーンズにアロハシャツを着た公平。

詩織は、上はタンクトップで下はダブダブのスウェット。そして、ベースボールキャップを斜めにかぶっている。

公平「（呟く）ていうか、誘われたからって、ホントに来るなつーの」

詩織「なに？　なんか言った？」

公平「普通、来ねえだろ、誘われたからって」

詩織「いいじゃん、なんか興味あったから。秋葉くん見てると、面白いんだよね」

公平「（憮然と）俺の何が面白いんだよ？」

詩織、ニコニコと笑って答えない。

圭太「あの……お菓子とか食べる？　僕、いろいろと買ってきたから」

とリュックを開ける。中から、チョコレートやスナック菓子が出てくる。

詩織「食べる食べる。（見て）あたし、これがいいや」

とリュックに手を伸ばす。

×　×　×　×

三人が並んでお菓子を食べている。

詩織、突然クスクスと笑い出す。
詩織「この三人さ、他の人からはどんな風に見えてるんだろうね？」
○とあるキャンプ場・付近
圭太がスマートフォンにとり込んだ写真と実際の景色を比較している。
同じ風景である。
圭太「うん、ここだ」
詩織、写真を覗きこんで、
詩織「何を見てるの？」
圭太「ここから一時間くらい歩いた所に、小さな滝みたいなのがある場所があるんだ。前に来たことあるから、そこに行こうかと思って」
詩織「ふーん」
圭太「公平も覚えてるでしょう、ここ？」
公平「へっ？　俺？　（あたりを見回し）いや、全然」
圭太「覚えてないの？　四年生の時、一緒に

来たでしょう？」
とスマホに別の写真を出す。
それは、十歳の頃の公平と圭太の写真。
二人は、沢の中で肩を組み、楽しそうに写っている。
圭太「家族でキャンプする時、公平も誘って、ここのバンガローに泊ったのに」
写真を見る公平、思い出した様子。
詩織、写真を見て、笑い出す。
詩織「なんか、超仲良くない？　笑える！」
公平「いいんだよ、見なくてよ！　（圭太に）なんで、お前は、こんなのいちいちスマホに入れとくんだよ？」

○林道
先頭を歩く圭太。地図を手に、辺りを見回しながら、ずんずんと歩く。
少し遅れて公平と詩織。
詩織「ねえ？」
公平「なんだよ？」

詩織「あの子さ、なんかいろいろ準備してきたみたいだけど、今日のこと、どんだけ楽しみにしてたのって感じだよね」

公平、返事をせずに、前を歩く圭太の背中をじっと見る。

○小さな滝のある沢

水量が多く、水の落ちる音が響いている。

公平がトカレフを構えている。

五メートルほど先に空き缶。

詩織と圭太は、息をつめ見守っている。

公平、引き金を引く。

轟音と共に空き缶が吹っ飛ぶ。

笑顔を浮かべる公平。

詩織「……やっぱり本物って凄いね」

公平、圭太を見て、

公平「撃ってみるか？」

圭太「う……うん」

公平、トカレフを圭太に手渡す。そして、別の空き缶をセットして、

公平「しっかり持っとかないと、マジで反動が凄いからな」
圭太「……わかった」
圭太、緊張した様子でトカレフを構え、空き缶を狙う。
じりじりとして待つ公平と詩織。
が、圭太はいつまでも、なかなか引き金を引かない。
公平「（大きく）なげーよ！」
圭太「ごめん、なんか緊張しちゃって」
公平「こっちまで緊張しちまうって！」
圭太「ごめん」
詩織「ねえ、あたしにもちょっと持たしてくれない？　撃たないからさ」
公平「おう、ちょっと待ってろ」
と圭太からトカレフを受け取り、弾倉を引き抜く。
公平「これ、安全装置がないからよ、念の為」
詩織、トカレフを公平から受け取る。
詩織「これでも結構重いね」

と言いながらトカレフを構える。そして、
圭太の方に銃口を向け、
詩織「（口真似で）バーン」
と引き金を引く。
同時に轟音。そして詩織は後ろに転がる。
公平、慌てて駆けつけ、
公平「大丈夫か！」
詩織「うん……びっくりした」
公平、トカレフを拾い上げ、
公平「そうか、中に弾が残ってたのか」
公平と詩織、圭太を見る。
圭太は頬を押え、へたり込んでいる。
公平「圭太！」
詩織「（同時に）大丈夫？」
圭太、茫然として反応しない。
公平「（大きく）圭太！」
圭太「た、弾が……ここを」
と恐る恐る頬に当てた手を見る。
なんともなっていない。
圭太「……弾が、ここをビュって」

とジェスチャーで弾が頬をかすめたこと
を示す。
公平「大丈夫だよ、なんともなってないって！」
圭太「（震えて）でも、ここを弾がビュって」
笑い出す公平と詩織。
公平「だから、大丈夫だって。なんともなっ
てないからよ！」
詩織「（笑って）ごめんね、まさか弾が出るな
んて思ってなかったから。でも、ホントに
なんともなってないから」
圭太「うん……大丈夫」
×　×　×　×
三人がおにぎりを食べ、ジュースを飲ん
でいる。
圭太「あのさあ、みんなで写真撮ろうか？」
とリュックからデジカメを取り出す。
公平「そんなもんまで用意してたのかよ？」
圭太「うん。駄目かな？」
詩織「いいよ、みんなで一緒に撮ろう」
×　×　×　×

圭太、セルフタイマーをセットしてから、
急いで公平、詩織と並ぶ。
シャッター。
公平は、凄んだポーズをとる。
圭太「今度は、公平と上原さんの二人を撮ってあげるよ」
公平「（苦笑）いいよ、別に」
圭太「いいから、いいから」
と張り切ってカメラの所へ向かう。
詩織、圭太を見ながら笑顔で、
詩織「なんか超楽しそう」
圭太、カメラを構え、
圭太「はい、笑って！」
公平、ヤンキー座りをして、カメラを睨みつける。
詩織「（笑って）やっぱ写真撮る時は、そういう感じでいくんだ」
公平「あたりめーだ。撮られる以上は、気合い入れとかねえとな」
圭太、シャッターを切る。

圭太「もう一枚撮りまーす」
と再びカメラを構える。
公平、少しポーズを変え、やはりカメラを睨みつける。
が、詩織はほとんど無表情のまま。
詩織「（小声）あのさあ……実は、ちょっと頼みがあるんだけどさ」
圭太「（大きく）はい、二人ともこっち見て」
公平「（詩織に）なんだよ？」
詩織「もし、もし無理だったら、気にしなくていいからそう言って」
カメラを構える圭太、二人の雰囲気が違うのに気付き、カメラをおろす。
圭太「……？」
公平「（詩織に）だから何だよ？　言えよ」
詩織「あのさあ、撃って欲しい奴がいるんだよね」
公平「撃つ？　人間かよ？」
詩織「ていうか本当に撃たなくてもいい。ただ、そいつを脅して、あたしを助けだして

欲しいんだ」

○ラブホテル街（夜）

野球帽をかぶった公平が走っている。

詩織の声「……でも、無理ならいいよ。ヤバいからね。あたしが自分でなんとかする」

立ち止まる公平、荒い息を整える。

腹のあたりに手をやり、そこにあるトカレフの感触を確かめる。

ふと後ろを見ると、そこに圭太がいる。

圭太は、鞄をたすきにかけ、塾通いの中学生といった恰好をしている。

驚く公平。

公平「（小声で）なんでついてきてんだよ。来るなって言ったろ！」

圭太「だって……」

公平「だってじゃねえよ！　ヤバいんだぞ。お前の来るとこじゃねえって！」

圭太「だったら公平も帰ろうよ。いくらなんでも危なすぎるよ」

公平「そうはいくかよ。約束しちまったしな」
圭太「だったら僕も行く。公平が心配だから」
公平「あのなあ、俺はもう何回も警察に捕まったことかあんだよ。今さら一回くらい増えたって、たいしたことねえって」
圭太「でも、今度は銃の不法保持だよ。それに、ひょっとすると……」
公平「……」
圭太「とにかく一緒に行く。僕にだって、手伝えることがあるかもしれないから」

○ラブホテル『パンテオン』・付近（夜）
本間のベンツが停まっている。

○その車内（夜）
車内の時計は八時三十分。
運転席に本間、助手席に詩織がいる。
本間「そろそろだな。あのおっさん、時間にはやたらと正確だからな」
詩織「……」

本間「まあ、よろしくサービスしてやってくれよ。上客だからよ」
詩織、むっつりと押し黙ったまま。
本間、いきなり詩織を叩く。
本間「テメエ、なに不貞腐れてんだよ！　なんか文句でもあんのかよ！」
詩織「だって、こんなの変だよ」
本間「何回も説明しただろうよ！　金がいるんだよ！　なあ？　この俺が頭下げてんだぞ。頼み聞いてくれねえのかよ！」

○ベンツが見える地点（夜）
公平と圭太が来る。
公平「あれだ」
緊張した様子の圭太。
公平「お前、本当にいいのか？」
圭太「うん。で、僕は何をすればいいの？」
公平「車を蹴飛ばせ。助手席側から、車をガンガン蹴飛ばせ」
圭太「で、でもベンツだよ」

公平「関係ねえって、そんなの。いいな、遠慮しねえで、ガンガン蹴飛ばせ。で、後は俺に任せとけ」

圭太「わかった」

公平、自分の野球帽を圭太にかぶせ、

公平「これかぶって、少しでも顔を隠せ」

圭太「（笑顔）うん、ありがと」

公平「よし、行くぞ！」

○ベンツ車内（夜）

本間と詩織がキスをしている。

本間「（優しく）なあ、頼むよ詩織。お前ほどの女だから、あのとっつぁんだって一回で六万も出すんだぞ。効率いいと思わねえか？　そこらへんのブサイクだったら、いくら中学生でも、せいぜい一万だって」

と再び詩織にキス。

詩織、ポケットからそっとナイフを取り出す。そして、それを本間のわき腹に向ける。

その時、ベンツに衝撃。
運転席側と助手席側から、それぞれ公平と圭太がベンツを蹴りまくっている。
本間「な、なんだ！　（ドアを開け）なんだ、テメエら！」
圭太「女寄こせ、コラあ！」
とトカレフを突き付ける。
本間、トカレフを見て、硬直する。
その間も、圭太は助手席側のドアを蹴り続けている。
公平「女、寄こせって言ってんだ！」
公平、引き金を引く。
轟音。そして、フロントパネルの辺りが砕け散る。
公平「（怒鳴る）女ァ寄こせ！」
本間「やる！　やるから勘弁してくれ！　（詩織に）お前、降りろ！」
詩織「あたし、やだよ！」
本間「（叫ぶ）降りろって言ってんだ！」
と助手席側のドアを開け、詩織を蹴飛ば

しておろす。
公平、トカレフを構え、
公平「さっさと行け！　殺すぞ！」
本間、悲鳴をあげベンツを発進させる。
残った公平、圭太、詩織、お互いの顔を
見合わせる。
公平「（詩織に）なんか『あたし、やだよ』と
か微妙に演技してなかった？」
詩織「（笑って）うるさいよ。なんか、それら
しかったでしょう？　さあ、行こうよ。通
報されてるかもしれないから」

○タイヤ公園（夜）
古タイヤによって大きな恐竜や様々な遊
具が作られた公園。
並んだタイヤの上に腰掛ける公平、詩織、
圭太。
詩織「……あたしさあ、ここ来る前の学校で、
けっこういじめられてたんだよね。あんま
愛想とかないし。先輩に目つけられちゃっ

て。そしたらだんだん、クラスの連中にまで伝染して……けっこう悲惨だった」

詩織、タイヤから降りる。

詩織「でさあ、自分で言うのもなんだけど、あたしってけっこう可愛いじゃん。(笑って)そう思わない？」

公平「(苦笑) 知らねーよ、そんなの」

詩織「けっこう男の先輩たちからモテてたわけよ。だから、地元で一番怖いって有名な先輩と付き合うことにしたんだ。そしたら、どうなったと思う？」

公平・圭太「……」

詩織「(吐き捨てるように)あたしをいじめてた先輩たちが挨拶してくるようになった。『こんにちは』とか言って。バカバカしい！中学生って、ホント面倒くさいよ。そう思わない？」

圭太「(強く) 思う。ホントにそう思う」

公平、驚いて圭太を見る。

詩織、微笑んで圭太を見て、

詩織「で、こっちに転校してきてからも、なんか雰囲気ヤバかったから、とりあえず危なそうな男と付き合うことにしたんだ。それがさっきの奴。でも、そいつはとんでもないバカだった。付き合い始めて、すぐこれだもん。（笑って）まあ、ホントにバカなのはあたしなんだろうけどさ」

その時、赤色灯を点けたパトカーがくる。

圭太「警察だ！」

公平「隠れろ！」

三人、身を低くし、タイヤの陰に隠れる。

詩織「通報があったのかな？」

公平「そうかもな。まあ、ホントに撃っちゃったからな」

クスクス笑い出す詩織。

詩織「凄い迫力だったよね。あのバカ、完全にビビってたもん。それに（と圭太を見て）成原くんも凄かったよ」

公平「おう、あれは凄かった。無言でひたすらベンツを蹴り続けるとか、普通、なかな

かできねえぞ」
圭太「だって、公平が蹴れって。それに夢中だったし」
公平「それにしたって、ありゃ怖えよ。あいつ、絶対にちびったって」
三人、身をかがめ、笑いあう。
圭太、身をかがめたまま素早く移動し、パトカーが去ったことを確認する。
圭太「安全確認ヨシ！　敵の姿なし。今のうちに撤収すべきと思うがよろしいか？」
と妙にはしゃいた軍隊風の口調で言う。
公平と詩織、顔を見合わせ笑いだす。
詩織「どうしたの？　なんかすっごいテンション高くなってない？」
公平「ていうか、なんのキャラだよ、それ？」
圭太、返事をせずに、胸を張って晴れ晴れとした笑顔で敬礼する。
顔を見合す公平と詩織。
まず詩織が笑顔で圭太に敬礼を返す。
そして公平もつられて敬礼をする。

○公平の部屋（深夜）

公平がトカレフを構えている。

顔にじんわりと満足の笑顔が浮かんでくる。そして、いつまでもトカレフを構え続ける。

○さくら中学校・三年二組・中

数学の授業中。

半袖の夏服姿の生徒たち。

暇そうな公平、空いている圭太の席、そして詩織の横顔をそっと見る。

○裏路地（夕方）

公平、須藤、沼上らがいる。

公平、ヤンキー中学生Ｂの顔を楽しそうに蹴りまくっている。

中学生Ｂ、ぐったりと動かない。

沼上「おい、もうやめといてやれよ。相手、死んじゃうぞ」

公平「（笑って）そう簡単に人は死なねえって。

お前、ビビりすぎ」
沼上、ムッとした表情。
沼上「誰がビビってんだよ。俺は、そこまでやる必要があるのかって言ってんだよ」
公平「だから、それがビビってるってんだよ。これくらいたいしたことねえって」
沼上、公平を睨みつけ、
沼上「お前、なんか最近調子乗ってねえか？」
公平「（笑って）そうか？　これが俺の普通だけどな」
向き合う公平と沼上。一触即発の雰囲気。
須藤「やめとけって。仲間内で喧嘩してどうすんだよ？　行こうぜ」
と歩き出す。
公平、沼上を挑発するように肩をいからせて歩く。
沼上、不機嫌な表情でそんな公平を見る。

○圭太の部屋・中
公平が一人で漫画本を読んでいる。

部屋の外から「うるさいな！　ちゃんとやってるから、放っといてよ！」という圭太の怒鳴り声が聞こえてくる。

公平「……」

×　×　×　×

ローテーブルの上にロールケーキと紅茶。公平、それを食べながら、

公平「なあ、俺、邪魔？」

圭太「ううん、全然」

公平「高校、どこ受けんの？」

圭太「一応、緑園高校にしようかなって」

公平「へー私立のいいとこじゃん。まあ、お前んち、金持ちだからな」

圭太「公平はどこ受けるの？」

公平「知らね。たぶん底辺の公立のどっかじゃねえか。私立に行く金とかねえし」

圭太「ふーん」

公平「ていうかさ、圭太って中学受験するんじゃなかったっけ？」

圭太「そうだったっけ？」

公平「確かそうだよ。なんで受験しなかったんだよ？」
圭太、悲しげな表情。が、笑顔を作り、
圭太「まあ、なんとなく……みたいな」
公平「（笑って）なんだよそれ。もったいね」

○さくら中学校・三年二組・中
朝のホームルーム。
関根「えーと、今日いないのは、いつものように成原と……」
関根、もう一つの空席を見つけ、
関根「おっ、今日は須藤も休みか。連絡事項は特になし。じゃあ、今日も一日、平和によろしくやってくれ」
沼上がムカついた表情で公平を見ている。
×　×　×
公平と沼上が対峙している。
公平「なんなんだよ、テメエはよ？　なんでいちいち絡んでくるんだよ？」
沼上「お前が、最近調子に乗ってんのがムカ

つくんだよ」
公平「だから、乗ってねえって！」
沼上「あ？　だからその態度が調子に乗ってるっていうんだよ」
と公平の胸倉を掴む。
公平、怯んだ表情をする。
沼上「殺すぞ、チビ」
公平、ムッとした顔をする。
沼上、余裕の表情で公平に顔を近付け、
沼上「文句があるならやるか？」
公平「……」
沼上「（笑って）ホントは弱えくせによ」
公平の表情が変わる。
公平「誰が弱えんだよ！」
と言うなり頭突き。
鼻を押え、うずくまる沼上。
公平、そのまま沼上の顔を蹴りまくる。
公平「どっちが弱えんだよ！　テメエだろうが！　根性ねえのは、テメエだろが！　ナメんな、クソがぁ！」

○さくら中学校・体育館裏（日替わり）
須藤と、その横に腫れあがった顔の沼上がいる。
向かい合って公平。
更に取り囲むように数人のギャラリー。
須藤「なに仲間内で喧嘩してんだよ？」
公平「だって、こいつが喧嘩売ってきたから」
須藤「しかも不意打ちらしいじゃねえか」
公平「不意打ちじゃねえって！」
須藤「でさあ、（沼上を見て）こいつがもう一回、お前と勝負したいんだってよ。どうする、やるか？」
公平「……」
須藤「ていうか、やれよ」
沼上、前に出て公平と向き合う。
沼上「今度は遠慮しねえぞ。まあ、ここまでやられて遠慮するバカはいねえけどな」
沼上、公平の腹を蹴り、足を払い転ばす。
そして公平を蹴りまくる。
公平は何もできない。

公平「わかった！　俺が悪かった！　だから、勘弁してくれ！」

沼上、笑って蹴るのをやめ、

沼上「お前、弱すぎねえ？」

公平、弱々しく立ち上がる。が、その瞬間に、すかさず沼上に殴りかかる。

沼上、軽くそれをかわし、公平を殴る。

沼上「お前って、ホント卑怯な。卑怯なことやらなきゃ勝てねえのかよ？」

と公平を殴り続ける。

×　×　×　×

血を流し、ぐったりと倒れている公平。

それを見下ろす須藤や沼上たち。

須藤「それにしてもこいつ弱かったな。秋葉ってこんなもんなのか？」

沼上「（笑って）そりゃあそうだよ、こんなチビ。武器使って、先制攻撃してイキがってただけだし」

笑いあう須藤たち。そのまま公平を置いて去っていく。

公平、屈辱の表情を浮かべている。

○スナック『カルデラ』・中（夜）

須藤が床の上に正座している。

その前にはソファに座る牟田浩文（25）。

牟田は首から肩、腕までびっしりと刺青が入っている。

牟田の周りには取り巻きの男たち。

牟田「須藤、お前、まだわかんねえみてえだな。少し調子に乗りすぎじゃねえか？」

須藤「いえ、乗ってません」

牟田、立ち上がり須藤の顔を蹴る。

牟田「なに言い返してんだよ？　それが調子に乗ってるっていうんだよ！」

と更に須藤を蹴りまくる。

牟田「イラつく野郎だな！　金さえ集めてりゃあいいってもんじゃねえんだよ！　規律ってもんが大事なんた！　わかってんのか、ああ？」

須藤、体を丸め、腕で頭を守り、ひたす

ら牟田の蹴りを耐える。が、その表情は怒りで燃えている。

〇さくら中学校・三年二組・中

公平と中村太一（15）が対峙している。中村も髪を染め、やんちゃそうな外見。それを取り囲んでいる須藤や沼上たち。

公平、須藤を見て、

公平「なんで俺が、こいつと喧嘩しなくちゃいけねえのよ？」

須藤は、猛烈に不機嫌そうな表情。

須藤「ああ？　俺が見てえからだよ。さっさと戦え」

公平「だって、喧嘩する理由とかねえし」

須藤、いきなり公平を殴りつけ、

須藤「なに言い返してんだよ！　てめえが俺に逆らう権利なんかねえんだよ！」

頬を押え、うずくまる公平。

須藤「（中村に）中村ァ、遠慮しねえで、ガンガンやってやれ」

中村「……わかった」

須藤、公平の首根っこを掴み、公平を立たせる。

須藤「さっさと立てよ！　（中村に）おい、始めろ！」

公平、覚悟を決めたように中村に殴りかかる。が、簡単にかわされ、殴られ、蹴られ、不様に倒れる。手も足もでない。

×　×　×　×

公平が床に転がっている。

須藤、そんな公平をじっと見る。次第に笑いがこみあげてくる。

須藤「ちったあ気分が晴れたよ。秋葉、ありがとな」

と仲間を引き連れて去っていく。

残された公平、屈辱の表情。

○同・体育館・裏（日替わり）

日に焼けた坊主頭の野木友良（14）が公平と向かい合っている。

周囲には須藤たち。
野木「（須藤に）本当にやってもいいの？」
須藤「かまわねえよ。どんどんやってくれ」
野木「まあ、後腐れないんだったらやるよ。俺、こいつ嫌いだし」
ムッとした表情の公平。殴りかかるが、あっさりとかわされ、カウンターのパンチを浴び、倒れる。
野木「（笑って）部活で毎日鍛えてた俺らが、こんなバカに負けるわけねえって。（須藤に）これでいいの？」
須藤「おおご苦労。（公平に）お前、あいかわらず弱えーな。面白すぎるぞ」

○同・三年二組・中（日替わり）
公平が二見と対峙している。
怯えた表情の二見。
それを面白そうに須藤らが見守っている。
須藤「気をつけろよ、頭突きが来るぞ」
沼上「（笑って）大丈夫だって。二見が本気出

せば勝てるからよ」
公平が二見に突っ込んでいく。
沼上が足を出し、公平を転ばせる。
公平「何すんだよ！」
沼上「悪い悪い。足が滑っちまってよ」
と須藤らと笑いあう。
公平「なんだ、それ？」
横から須藤が、いきなり公平を蹴る。
公平「（須藤に）なんなんだよ、もう！」
須藤の表情がサッと変わる。
須藤「なんだよ、その口のきき方はよ？　誰に向かって言ってんだ？」
公平「……だって、蹴ってくるから。一対一の喧嘩をするんでしょう？」
須藤「うるせえよ。俺は、お前が負けるのが見てえんだよ！」
と公平の腹を蹴る。
うずくまる公平。
須藤「ムカつく野郎だな！　言い返すんじゃねえよ！　テメエはただ、みんなからシバ

かれてりゃあいいんだよ！」
と公平を蹴りまくる。
沼上たち、その凄惨さに言葉が出ない。
詩織も、教室の片隅から、蹴られ続ける公平をじっと見ている。

○同・三年二組・中（朝）
朝のホームルーム。
関根「えーといないのは、いつものように成原と……おっ、後は秋葉か？　珍しいな」
と出席簿に記入。
須藤と沼上、顔を見合わせ苦笑いをする。

○圭太の部屋・中（夕方）
公平が漫画を読んでいる。公平の目と口は腫れあがっている。
圭太、心配そうな顔でそれを見て、
圭太「公平、大丈夫？」
公平「何が？」
圭太「その顔の……」

公平「（かぶせて）大丈夫だよ！　高校生二人相手に喧嘩しちまってよ。少しやられたけど、こっちの圧勝だったから」

圭太「……」

×　×　×　×

公平がロールケーキの最後の一切れを口に入れる。

部屋の時計は七時。

圭太、チラリと時計を見る。

公平、それに気付き、

公平「俺、邪魔？」

圭太「（慌てて）全然っ！」

公平「勉強とかしねーの？」

圭太「後でするし……それに、もう昼間もしたから」

公平「ふーん、よくやるなぁ」

と寝転んで漫画を読み始める。が、すぐに起き上がり、

公平「やっぱ帰るわ、じゃあな」

○同・玄関・中（夜）

ドタドタとやってきて靴をはく公平。

キッチンから美紀が、様子を窺うように公平を見ている。

公平、美紀に気付き、

公平「（大きく）ごちそうさまでしたぁ！」

○冷蔵庫の中

ほとんど空っぽで、食べ物らしきものは何もない冷蔵庫。

○公平の家・台所（夜）

その冷蔵庫を覗きこんでいるのは公平。

舌打ちをして荒っぽくドアを閉める。

○公平の部屋（夜）

公平がカップラーメンをずるずると食べている。そして最後の一滴までスープを飲み干すと、そのままゴロリと横になり、ぼんやりと天井を見つめる。

○さくら中学校・三年二組・中（朝）

朝のホームルーム。

生徒たちの服装は、冬服に変わっている。

関根「いないのは、今日も秋葉に成原と。えー連絡事項は無し。それじゃあ」

と教室を出ていく。

須藤と沼上、顔を見合わせ、笑い合う。

沼上「やべえよ、秋葉の野郎、完全に登校拒否になっちまったよ。どうする？　まるで、俺らがいじめてるみてえじゃんかよお」

須藤「少しは優しくしてやんか。あいつ、あれで金集めには便利だからな」

とスマホを取り出す。

詩織が、そんな須藤の様子を見ている。

○公平の部屋

公平が須藤からのメールを見ている。

その文面は「秋葉、元気か？　学校来いよ。楽しくやろうぜ！」と書いてある。

公平「（呟く）チッ、嘘くせえ」

ふと机の上にあるトカレフが目につく。
公平、それをじっと見る。

○さくら中学校・三年二組・中
休み時間。
ポツリと詩織が窓際に座っている。
教室の後方では、須藤や沼上らが公平をとり囲んでいる。

沼上「どうしてたんだよ、秋葉？　最近、ずっと来ねえでよ？」
公平、曖昧に笑い、
公平「ちっとダルかったからよ。それでな」
須藤「ちゃんと学校来いよ。お前がいないとつまんねえからよ」
と公平の肩にパンチ。
嫌そうな顔をする公平。
須藤「秋葉みたいな無茶する奴がいないと、つまんねえからな。とりあえず仲良くやっていこうぜ」
公平「まあ、無茶なら任せといてくれよ」

沼上「言うねえ」
と公平の腰の辺りを叩く。が、何か固い物を叩いてしまう。
沼上「痛！　お前、何入れてんだよ、そこによ？」
公平、「しまった」という表情。
公平「なんでもねーよ」
沼上「嘘つけ、また武器でも入れてんだろ。見せろよ」
公平「ちげーし」
沼上「じゃあ、何だよ？　見せろよ」
と公平の学ランをめくる。
そこにトカレフがある。
中村「（驚いて）わっ銃だよ！」
詩織、その言葉を聞き、ハッとして立ちあがる。
公平、慌てて学ランをおろす。
須藤「隠すなよ、見せろよ！」
と沼上と二人で公平を押さえつける。
そして中村がトカレフを取り出し、じっ

と見る。
それは、銃口が塞がった真新しいモデルガンである。
中村「これ、モデルガンだよ」
皆が笑いだす。
沼上が中村からモデルガンを受け取る。
沼上「（爆笑）なんなんだよ、これ？　これでどうしようっていうんだよ？　こんなんで強くなったつもりでいるのかよ？」
公平「うるせえな、返せよ」
須藤「だって、こんなの持っててどうすんだよ？　脅しにも使えねえだろ」
沼上「使うんだって。強盗にも使えるよな、これ。それにいざとなったら、（殴る真似）こうやって、武器にも使えるし」
須藤「（爆笑）撃って使えって、銃なら。て、弾が出ねえのか！　こんなもん持ったって、強くなれねえぞ、秋葉！」
公平「返せって！」
と沼上からモデルガンを奪い返す。

公平「お前らには関係ねえだろ」
ムッとした表情をする須藤。
須藤「お前らっていう言い方はねえだろ。テメエにお前呼ばわりされる筋合いはねえんだよ」
公平「……帰るわ」
と歩き出そうとする。
中村が、公平の肩を掴み、
中村「ちょっと待てよ」
公平「離せ！」
とモデルガンの柄で中村を殴る。
血を流し、うずくまる中村。
須藤「（怒鳴る）何すんだ！　仲間によ！」
沼上「また武器使いやがった！」
怯えた表情の公平。逃げ出していく。
沼上「待て！」
と須藤と共に追いかけていく。
○同・廊下
公平、すぐに沼上に追いつかれる。

モデルガンを振り回し抵抗するが、横から須藤に殴られる。
公平「離せ、バカ野郎！」
須藤「なんだと！　仲間、怪我させといて逃げるとか、あんのかよ！」
と公平を殴る蹴る。
公平、皆からボコボコにされる。

○商店街・刃物店の前
顔を腫らした公平が、刃物店の前に立ち、売り物のナイフなどを見ている。
詩織の声「やめといた方がいいと思うよ」
振り返る公平、そこに詩織がいる。
公平「上原……」
詩織「仕返しとか、バカバカしいから、やらない方がいいよ」

○タイヤ公園（夕方）
公平と詩織が並んでタイヤに座っている。
詩織「前にさ、地元で超有名な悪い先輩と付

き合ったら、いじめがなくなったって話したでしょう。あの話には続きがあるんだ」

公平「……」

詩織「彼、恐れられてたから、みんながあたしの言うことを聞くようになった。だからさ、あたしのことを一番いじめてた先輩に仕返ししちゃったんだよね。エグいくらいに。そしたら、どうなったと思う？」

公平「……」

詩織「その先輩、自殺しちゃったよ。まあ、未遂だったから、まだ良かったんだけどさ。さんざん人にやっといて、同じこと自分がされたら自殺ってどういうこと？　反則だと思わない？」

公平「……」

詩織「バカバカしいよ、仕返しなんて。ただ、それだけが言いたかったんだ」

と言って立ち上がる。

詩織「前にさ、秋葉くんを見ているのが面白いって言ったの覚えてる？」

公平「ああ」
詩織「（笑って）なんか、無理してる感じが、あたしに似てるなって思ってたんだ。だから、余計なお世話だと思ったけど、つい口出しちゃった」
公平「俺は、無理なんかしてねえし」
詩織「（笑って）そっか。じゃあ、今言ったこと忘れて」
と去っていく。
公平、その後ろ姿を見て、
公平「（呟く）俺は……ナメられるのだけは絶対に嫌なんだ」

○公平の部屋（夜）
公平がトカレフを構え、じっとしている。

○詩織の部屋（夜）
詩織がベッドに寝転んでいる。
詩織のスマホが鳴りだす。
登録されていない番号。

不審そうに電話に出る。
詩織「……もしもし」
本間の声「詩織、久しぶりだな？　元気にやってるかよ？」
詩織「……」
本間の声「携帯替えたくらいで俺から逃げられると思ってたのか？」
詩織「……別にそういうわけじゃあ」
本間の声「どうしてた、あれから？」
詩織「大変だったよ。あれからずっと監禁されてて、いろんな男たちからさ――」
本間の声「（強く）嘘つけ！　全部わかってんだよ！　あんときいたのガキじゃねえか。ナメた真似すると、お前も殺すぞ！」
詩織「……」
本間の声「一度会おうぜ。ベンツの修理代とか、あの時のクソガキ共のこととか色々聞きたいことがあるからよ。でよ――」
詩織、途中で通話を切る。
すぐに再びスマホが鳴りだす。

詩織、電源から切り、机の上にスマホを投げだす。怯えた表情。

○さくら中学校・三年二組・中
数学の授業中。
圭太と公平の席は空席のまま。

○公平の部屋
公平が寝転んで煙草を吸っている。
そこにメールが来る。
メールは圭太からで「公平、元気にしてる？　漫画も増えたし、遊びにおいでよ」と書いてある。

○圭太の部屋（夕方）
公平、漫画を読みながらロールケーキをパクついている。
床の目立つ所に高校案内が置いてある。
公平、気付いて、それを手に取る。
公平「これ見ていいか？」

圭太「うん」
公平、パラパラとページをめくる。
圭太「どこらへんを受験する予定？」
公平「いや、知らん」
圭太「でも、三者面談とかは？」
公平「……」
公平、高校案内を閉じ、
公平「まあ、高校なんて別に行かなくてもいいからな」
圭太「いや、行った方がいいよ。なるべくなら行った方がいいと思う」
公平「（笑って）ていうか、俺に行ける高校なんてあんのかね？」
圭太「あるよ、絶対！　その本、家に持ってっていいから。読んで参考にしなよ」
公平「おう……じゃあ、一応借りてくよ」
圭太「だから、中間テストと期末テストとかはちゃんと受けておいた方がいいと思う。内申書は、三年の二学期の成績が一番大事だから」

公平「うん、そうだな」
と言って黙りこむ。
公平「……なあ、圭太？」
圭太「なに？」
公平「いろいろ悪かったな、今まで」
圭太、驚いた表情で公平を見る。
圭太「……いいよ、別に」
と、少し顔をそむける。
黙りこむ二人。
ふと見ると圭太が泣いている。
公平「（驚いて）なに泣いてんだよ？」
圭太「（泣き笑い）だって……公平が、急に変なこと言うから」
公平「べ、別に変なことなんて言ってねえだろ！　ていうか、泣くなよ、そんなことで！」
圭太、涙を拭い、
圭太「泣いてないって」
公平「泣いてるよ！　泣くなよ、もう！」
と言いながらも公平も涙ぐんでいる。
公平「お前、ふざけんなよ。男が、そんなこ

とで泣いてどうするんだよ、まったく！」
圭太「だから泣いてないって」
必死に涙を拭う圭太。
二人、お互いの顔を見て、泣きながら笑い合う。

○成原家・玄関・外（夕方）
公平、玄関を出て門に向かって歩く。
背後の玄関のドアが開き美紀が現れる。
美紀「ねえ、あなた」
公平、振り返る。
公平「はい？」
美紀「悪いけど、もうここには来ないで」
公平「は？」
美紀「わかるでしょう？　圭太はあなたとは違うの」
公平「……」
美紀「圭太にとって、あなたは害悪でしかない。だから二度とここに来ないで」
公平「……」

美紀「お願いだから。圭太のために、二度とここには来ないで」

○公平の部屋（夜）

公平、部屋に入ってくるなり、不機嫌な表情で高校案内を壁に投げつける。

部屋の中央に立ち、なんとかこみあげてくる怒りを必死に押える。深呼吸。

そして、高校案内を拾い上げ、熱心にそれを読み始める。

○詩織の部屋（夜）

詩織、厳しい表情でスマホの画面を見ている。

そこには「逃げられると思うな。ガキ二人の情報を教えろ。そうすればお前は許してやる」と本間からのメール。

○さくら中学校・三年二組・中（朝）

黒板に「中間テスト」の文字。

朝礼、関根が出席簿を手にクラスを見て、
関根「えーと成原は、(圭太を見て)来てると。
あとは・・・・・秋葉は来てないのか」
圭太、心配そうな顔で空いている公平の
席を見る。
その時、教室の後ろのドアが開く。
関根「おお秋葉、来たか――?」
皆が振り返り公平を見る。
公平は、髪型をモヒカンにし、色を金髪
に染め直している。
関根「・・・・・早く席につくように」
公平、返事をせずに自分の席に着く。
須藤と沼上、顔を見合わせクスクスと
笑っている。
沼上「モヒカンて」
須藤「やべえ。超カッコいい」
クラス中に笑い声が静かに拡がる。
そんな中、圭太だけが心配そうに公平を
見ている。
そして詩織は、クラスの様子にまるで関

心を払わず、じっと前を見据えている。

×　×　×　×

帰りのホームルーム。

関根「連絡事項は特に無し。以上」

女子生徒Ａ「起立」

ガタガタと生徒たちが起立。

女子生徒Ａ「礼」

生徒たちが礼をし、関根が出ていく。

公平も、そそくさと教室を出ようとするが、その前に須藤が立ちはだかる。

須藤「なに逃げてんだよ？」

公平「いや帰るだけだし」

須藤「じゃあ、いつもの遊びやろうぜ」

公平「……」

須藤「（笑って）お前の強さ見せてくれよ」

と背後の沼上を見る。

そこでは圭太が沼上に捕まっている。

○体育館・裏

公平と圭太が対峙している。

それを取り囲む須藤や沼上たち。
須藤「さあ、最弱決定戦をやろうぜ」
沼上「気合い入れて行こうぜ！」
公平「なんで、こんなことしなくちゃいけねえのよ？」
須藤、後ろから公平を蹴り、
須藤「だから、俺に言い返すなって言ったろ？お前は、ただ言われた通りにしてりゃあいいんだよ」
公平、圭太を見る。
圭太は、泣きそうな表情をしている。
公平、ため息を一つついて、
公平「わかったよ、やるよ。（圭太に）てめえ、覚悟しろよ！」
と圭太の腹を蹴る。
更に膝蹴りから、圭太の髪を掴み、頭突きを入れる。
歓声。
公平が、更に攻撃を加えようとすると、
誰かが足を掛け、公平を転ばす。

公平「誰だよ！」
誰も返事をせず、笑って公平を見ている。
公平「誰だって聞いてんだよ！」
須藤「そんなことといいから、さっさと戦えよ！」
公平、仕方なく圭太に向かおうとするが、
横から沼上に足を蹴られる。
沼上「悪い悪い、また足が滑っちまった」
公平、今度は後頭部に石をぶつけられる。
振り返るが、誰が投げたかわからない。
公平「なんなんだよ、お前らよ！　ふざけんなよ！」
沼上「いいから、戦えって！　（圭太に）ほら成原、チャンスだぞ！」
と後ろから公平を羽交い絞めにする。
もがく公平。
公平「ふざけんな！　なんなんだよこれ？
一対一じゃねえのかよ？」
須藤「（笑って）うるせえな！　ほら成原、仕返しのチャンスだぞ！　今までやられた分、やり返してやれよ！」

困惑した表情の圭太。一瞬の隙をついて
逃げ出していく。
沼上「捕まえろ！」
何人かの男子生徒が圭太を追っていく。
もがき続ける公平。
公平「（須藤に）なんなんだよ、これ？　なんで、こんなことするんだよ？」
須藤「面白れえからやってんだよ。お前をいじめんのが面白れえんだよ」
公平「ちょ、待ってよ。何なのよ、それ？　俺たち仲間だろ？」
笑いだす須藤と沼上。
沼上、後ろから公平の後頭部に頭突きを入れて、
沼上「なんで俺らが、お前なんかの仲間なんだよ。勘違いするなバカ」
須藤「お前って、本当にバカだな」
公平、屈辱の表情を浮かべる。
そこに中村らに連れられた圭太が来る。
須藤「おう成原、このモヒカンバカをぶっ飛

ばしてやれよ！」
泣きそうな顔の圭太。
中村がナイフを圭太に突き付け、
中村「早くやれよ」
圭太「……嫌だ」
中村「あ？　なんだって？」
圭太「（叫ぶ）嫌だ！」
と再び逃げ出そうともがく。
中村、ナイフの先端をわずかに圭太の頬に刺す。流れる一筋の血。
圭太、怯えた表情。
中村「やれって言ってんだよ」
公平「（怒鳴る）成原ぁ、さっさとやれよ！　テメエなんかに情けかけられる俺じゃねえんだよ！」
中村「（笑って）ほら、バカもああ言ってるぞ。遠慮しねえでやってやれよ」
圭太、目に涙をいっぱいに溜めて、公平の前に立つ。そして、弱々しくビンタ。
須藤「もっと気合い入れていけ！　パンチで

いけパンチで！」
圭太、拳で公平の顔を殴る。
沼上「もっと全力で行けって！」
あばれる公平。なんとか圭太を蹴ろうともがく。
公平「もっと来いよ、こらあ！　全然痛くねえぞ！」
圭太、泣きながら力を込めて公平を殴る。
公平「（暴れながら）全然きかねえぞ！　もっと来いや！」
泣きながら公平を殴り続ける圭太。
公平の顔は腫れあがり、口から血を流す。

○河川敷沿いの道
公平と圭太が並んで歩いている。
公平の顔は腫れあがり痛々しい。
圭太「大丈夫？」
公平「……」
圭太「ごめん」
公平「なんで謝んだよ？」

圭太「だって殴っちゃったし」
公平「別にお前が悪いわけじゃねーだろ」
圭太「でも……公平に怪我させちゃったし」
公平、突然圭太の胸倉を掴む。
公平「(大声)うるせーんだよ！　なんでテメエなんかに俺が情けとかかけられてんだよ！　こんなのどーってことねえよ！」
圭太、悲しげな目で公平を見る。
公平「俺はあいつらを許さねえ。絶対にぶっ殺してやる！　人をナメやがって！」
と圭太を離して歩きだす。
圭太、追いついて、
圭太「ダメだよ、殺すとか！」
公平「うっせえ！　絶対あいつら殺す！」
圭太「ダメだったら！　テストなら保健室とか会議室で受けさせてもらえるように先生に話してみるから、そうすれば――」
公平、いきなり圭太を殴る。
公平「うるせーんだよ、お前は！　そういう問題じゃねーんだ！」

うずくまる圭太を公平は殴り蹴る。
公平「(蹴りながら)俺は絶対に負けねえんだ。誰にも絶対に負けねえんだ。あいつら絶対にぶっ殺してやる！」

○公平の家・リビング（夕方）
公平が帰ってくる。
君江が化粧をしている。
無言で君江の後ろを通る公平。ふと見ると圭太から借りた高校受験案内がゴミ箱の中に汚れたちり紙などと一緒に捨ててある。
それに気付き、公平は足を止める。
君江の声「高校なんか行かせねーぞ」
公平、君江を振り返る。
君江は化粧の途中で、まるで異形の化け物のような顔で公平を見ている。
その異様さに公平は言葉が出ない。
君江「聞いてんのかよ？　高校なんて行かせねえって言ってんだよ」

公平「……最初から行く気ねーし」
君江、ニタリと笑い、
君江「だと思って、それ捨てといてやったよ」
公平、無残に捨てられた高校案内を見る。
が、何も言わずに部屋に入ろうとする。
君江「（吐き捨て）あーあ、おめえなんか産むんじゃなかったよ」
公平、立ち止まり振り返る。
公平「（怒鳴る）だったら殺せよ！　ああ！」
君江、驚いた表情で公平を見る。
公平「殺してみろ！　それとも俺がお前を殺してやろうか！」
と君江に近づく。
君江、公平の目に本気の殺意を感じ怯える。化粧が途中のまま、服を掴み、あたふたと玄関から逃げ出していく。
公平、ゴミ箱から高校案内を拾い上げる。

○同・公平の部屋（夕方）
公平、高校受験案内をむちゃくちゃに引

きちぎり、窓から投げ捨てる。
そして叫ぶ。窓から大声で意味不明の叫びを息の続く限り吐きだす。
机の奥底から隠してあったトカレフを取り出し、構える。
怒り。

○さくら中学校・三年二組・中

数学の試験中。
静かにテストを受ける生徒たち。
公平の姿はない。
圭太は落ち着かない様子。問題に集中しようとするが、何度も空いたままの公平の席を見てしまう。
その時、扉が開き公平が入ってくる。
試験監督の小山沙織（28）が何か言おうとするが、公平があまりに堂々としているので口をつぐんでしまう。
公平、遅れたことなど気にしないかのようにゆっくりと歩き、ことさら音を立て

て椅子を引きどかりと座る。そして、音を立てて鞄を机の上に置く。

沼上「うるせーぞ」

公平「あ？　なに？」

沼上「静かにしろよ。テスト中なんだよ」

公平、無視して鞄を開け、ふでばこを大きな音を立てて机に置く。

須藤「うるせ―ぞ！」

公平「そっちの方がよっぽどうるせーだろ」

須藤、驚いた表情で公平を見る。

公平は涼しい顔。

須藤「なんだ、でめえ？」

公平、まるで怯む様子もなく、口笛を吹き始める。

沙織、注意をしようと思うが、うろたえてしまい言葉が出ない。

圭太は不安そうな顔で公平を見ている。

沼上「てめえ、頭おかしくなったのかよ？　後で覚悟しろよ」

公平「（笑って）俺は今でも構わねえよ」

と立ち上がり、沼上に近付く。
そして制服の下から特殊警棒を取り出し、
沼上の顔面に叩きこむ。
鼻血。
沼上、立ち上がり、
沼上「てめえ、殺す！」
同時に公平、ズボンに挟んだトカレフを
取り出し構える。
沼上「（笑って）だからそんなおもちゃで――」
圭太「（同時に）逃げて！」
沼上、圭太の方を見る。
同時に銃声。圭太の方を向いたせいで、
体が動き、銃弾は沼上の肩の辺りを貫く。
沼上の肩から血が噴き出す。
悲鳴。生徒たちが立ち上がる。
圭太「公平！　ダメ！」
が、圭太の言葉は公平には届かない。公
平の目は須藤を探している。
たくさんの生徒たちが教室から逃げ出し
ていく。

その中に須藤の姿。

公平「（怒鳴る）須藤ォ！」

公平、トカレフを構え、須藤の背中に向けて引き金を引く。銃声。

弾ははずれ、ガラス戸が砕ける。

公平、須藤を追おうとする。

圭太「（叫ぶ）ダメだよ、公平！」

公平、一瞬圭太を振り返る。目が合う。が、すぐに振り切るように教室を飛び出していく。

圭太「公平！」

圭太も公平を追って教室を飛び出す。

大混乱の教室内。

が、詩織だけは悲しげな表情で圭太や公平が出ていった扉をじっと見つめる。

○同・廊下

肩から血を流した沼上がよろよろと逃げている。後ろから公平が来たことに気付き、泣きだし、座り込む。

沼上「（悲鳴）許してぇ！　お願いだから！」
が、公平は沼上に目もくれず、階段に向かっていく。
涙でぐしゃぐしゃな顔でほっとした表情を浮かべ、沼上はぐったりと寝転ぶ。

○同・階段
パニックになり階段を駆け降りる生徒ら。
その中を、飛ぶように走る須藤がいる。
須藤「どけ！　こらァ！」
少し遅れて公平が追ってくる。
生徒たちは、公平が来ると、悲鳴を上げ、道を譲る。

○同・校門付近
先を走る須藤に、公平がトカレフの狙いを定める。が、狙いが合わない。
諦め、再び須藤を追い始める。

○商店街

泣きそうな表情で須藤が走っている。車とぶつかりそうになり、なんとかかわす。そして、後ろを振り返ると、公平との距離が縮まってきている。
須藤、悲鳴をあげ、再び走り出す。

○河川敷

息を切らし、須藤が逃げてくる。
追って公平がくる。トカレフを構え、引き金を引く。銃声。
弾は、須藤の足に当たり、須藤は倒れる。
公平、須藤に近付いていく。
須藤、ぶざまに這うように逃げるが、すぐに公平に追いつかれる。
公平「（笑って）みっともねーな。おい」
とトカレフを構える。
須藤「（泣いて）頼む！　悪かった、撃たないでくれ。頼む、この通りだ」
と土下座をする。
須藤「僕が悪かったです。許してください、

お願いします！」
公平、無言でトカレフを突き付ける。
須藤「（悲鳴）お願いです！　許してください。どうか、撃たないでください！　僕、死にたくないです！」
トカレフを構える公平、号泣する須藤の姿を見て笑いだす。
公平「なに僕とか言ってんだよ？」
と須藤の顔を蹴る。
公平「今まで、さんざん偉そうにしてたくせによ。なに急に下手に出てんだよ。ああ？」
須藤「お願いします、勘弁してください！　僕たち友達じゃないですか！」
公平、須藤の顔面を蹴り、
公平「友達じゃねーし」
公平、何度も須藤の顔を蹴る。
公平「テメエみてえなバカのせいで、こっちは迷惑してんだよ！　全部メチャクチャになっちまったよ！」
須藤「（叫ぶ）ごめんなさい！　許してくださ

い。お願いします！」
公平「もう、遅せーんだよ。お前は、ここで死ぬんだ」
と引き金に指をそえる。
須藤は、子供のように大泣きをする。
須藤「ごめんなさぁぁい！　殺さないでくださぁい！　もう、悪いことしませんからぁ」
公平、噴き出して笑う。
公平「なんなんだよ、それは？　テメエはガキか？　泣いたって駄目だよ。お前は、死ぬんだ！　俺をナメた罰だ」
何台ものパトカーの音が近づいてくる。
そして、土手を駆け下りる警察官たち。
公平、その姿を確認して、
公平「もう死ねよ。俺は、もうどうだっていいんだ」
圭太の声「公平、ダメだよ！」
公平、声の方を見る。
警察官たちと反対側から圭太が、息を切らし来ていた。

圭太「公平、撃っちゃあダメだよ！」
公平「うるせえ、邪魔すんな！」
圭太「（泣いて）ダメだよ、絶対にダメ！」
と公平に向かって歩いてくる。
公平「こっち来んな！　お前も殺すぞ！」
圭太「ダメだったら。そんなことしたら人殺しになっちゃうよ！」
公平「いいんだよ、俺なんかどうだって！こっちに来るなって言ってんだろ！」
圭太、公平のそばまで来て立ち止まる。
一瞬の間をおいて、素早く公平の腕を掴み、トカレフを奪おうとする。
抵抗する公平。
公平「離せ、バカ！」
もみ合う二人。
銃声。
圭太が胸を押え、ずるずると地面に崩れ落ちる。胸から血が噴き出している。
茫然とする公平。
公平「（叫ぶ）圭太！」

とトカレフを放り、圭太にすがりつく。
公平「圭太！　大丈夫か！」
その時、走ってきた四人の警官が公平に飛びかかる。
警官Ａ「動くな！　逮捕する！」
暴れ、もがく公平。
公平「離せ！　離せ、バカ！」
警官Ｂ「十時十五分。銃刀法違反で緊急逮捕！」
公平「離せ！　逃げねえから離せよ！　圭太！　圭太！　大丈夫か！　救急車！　救急車呼んでくれよ！」
警官Ａ「動くな！　おい手錠！」
警官Ｂが、後ろ手に回した公平の手に手錠をかける。
暴れる公平。
公平「だから逃げねえって言ってんだろ！なあ、圭太の方を見てくれよ、なあ！」
警官Ｃが圭太を、警官Ｄが須藤のそばにいる。そして、警官Ｃが無線機に何かを伝えている。

圭太は、ぐったりとして動かない。
公平「お前バカかよ！　連絡とかいいから、血を止めろよ！　聞いてんのかよ！」
警官A「だから、動くな！」
と公平を強く押えこむ。
公平の声が涙声になる。
公平「だから、逃げねえって言ってんだろ。圭太をみてやってくれよ！　頼むからよ、圭太が死んじゃうよ！」
公平、ついに泣きだす。
公平「なあ、救急車呼んだのかよ？　なにシカトしてんだよ！　逃げねえって言ってんだろ！　頼むから、圭太の介抱してやってくれよ！　なあ！」
警官A「動くな！」
公平「（涙声）動かねえよ。だから、救急車呼んでくれよ。圭太が死んじゃうよ。頼むからさ！」
×　×　×　×
たくさんのパトカーや警察官、そして救

急車などが来ている。
騒然とした雰囲気。
集まった野次馬の中に詩織の姿がある。
視線の先には警察官に囲まれて、憔悴した表情で歩く公平の姿がある。
本間の声「見つけたぞ、詩織」
詩織、声の方を見る。そこに本間がいる。
本間「逃げんなよ」
詩織「……」
本間「逃げられねえって言ったろ。さあ、この前のガキのこと聞かせてもらおうか」
詩織「そこにいるよ」
とあごで警察官に囲まれパトカーに乗り込む公平をさす。
詩織「もう一人はあっち」
と周囲をシートに囲まれ、警察官たちが集まっている場所を見る。
詩織「……死んじゃったんだって」
本間、ため息をつき、
本間「じゃあ、やっぱり金の話はお前とする

よりねえか」
詩織、小さく噴き出して笑う。
詩織「まだお金の話をするんだ？　あんたホントのバカでしょう？」
本間「（強く）ああ？」
同時に、詩織は、どん、と体ごと本間にぶつかっていく。
驚愕の表情を浮かべる本間、自分の腹のあたりを見る。
ナイフが刺さっている。
詩織「（笑って）まあ、あたしはもっとバカなんだけどさ」
ナイフを抜き、再び体ごとぶつかる。
本間、ずるずると崩れ落ちる。
詩織、歩きだす。
隣にいた野次馬の中年女性が、ナイフが刺さったまま倒れた本間を見て悲鳴をあげる。
詩織、歩き続ける。
背後では騒ぎが大きくなっている。

走り出す詩織。
そのまま後ろを見ずに走り、土手を駆け上がる。
土手の道で、詩織の脇を公平の乗ったパトカーが走っていく。
公平の姿がちらりと見えた。
走り続ける詩織。
まるで公平の乗ったパトカーを追いかけるかのように必死に走る。
小さくなっていく公平の乗ったパトカー。
詩織の荒い呼吸音だけが残る。

了